

## 成人期におけるメンタライジング機能向上 に対する家族造形法による介入の可能性 ——研究動向と今後の展望——

Future possibilities of Family Sculpture in  
enhancing mentalizing abilities in adulthood:  
Recent issues and prospects

韓 悦琪<sup>1</sup> 興津真理子<sup>2</sup>

Yueqi HAN Mariko OKITSU

### 要 約

本稿では、成人期におけるメンタライジング能力の向上に対する心理的介入の効果に関する研究動向を示し、家族療法の一技法である家族造形法 (Family Sculpture) の有効性について展望を行った。従来のメンタライジング能力向上に対する心理的介入では、言語的なアプローチと体験的なアプローチを両立する困難さや、日本における実践の少なさといった問題点が示唆された。これらの問題に対して、家族造形法による介入は、造形制作という体験的なアプローチと造形後のフィードバックによる言語的なアプローチの両方を兼ね備えている。さらに、家族的な視点を持っている家族造形法による介入は、自己理解や感情状態に加えて原家族の家族関係に対する気づきを促進させる効果が認められており、メンタライジング能力に対する促進効果も期待できる。今後の展望として、家族造形法の実施マニュアルの作成、効果測定のための尺度の開発、それらを踏まえた無作為化比較試験、以上の3点を検討する必要性について論じた。

キーワード：メンタライゼーション、成人期のメンタライジング能力、心理的介入、家族造形法、家族療法

### はじめに

メンタライゼーション (あるいはメンタライジング) とは、社会認知能力の一つであり、「行動を心理状態と関連しているものとして捉え、

自他の状態・行動について心の中で推測し、解釈する」ことである (Bateman & Fonagy, 2004 狩野・白波瀬監訳 2008)。メンタライジング能力の発達は養育者との愛着関係と密接に関係し、その機能不全は感情調整障害やアイデンティティの混乱につながり、親子関係をはじめとした対人関係において問題を抱えやすいと考えられている (Bateman & Fonagy, 2016; 松葉他, 2019)。とくに、成人期のメン

<sup>1</sup> 同志社大学大学院心理学研究科 (Graduate School of Psychology, Doshisha University)

<sup>2</sup> 同志社大学心理学部 (Faculty of Psychology, Doshisha University)

タライジング能力は親自身だけではなく、その子どもにも影響を及ぼすとされている。メンタライジング能力が低い親は養育中にマルトリートメントや児童虐待をしやすく、それらのことは子どものメンタライジング能力低下につながると考えられている (Midgley et al., 2017)。したがって、成人期のメンタライジング能力向上に対する介入の必要性が示唆されている。

本稿では、メンタライゼーションの定義・特徴および、メンタライジング能力発達のメカニズムについて概観し、これまでに行われてきた成人期のメンタライジング能力向上に関する心理的介入の方法について概観し、諸問題点について検討する。そこから得た知見を踏まえて、成人期のメンタライジングの機能向上に対する新たな心理的介入の方法として家族造形法 (Family Sculpture) を提案することを目的とする。

## メンタライゼーションの定義

**メンタライゼーション (Mentalization) とは**

メンタライゼーションは、自己と他者の行動を心理状態 (思考, 欲求, 願望, 信念, 空想, 病理) と関連しているものとして捉え、解釈する (その原因, 影響, 意味などを含むストーリーを構成する) ことと定義されている (Bateman & Fonagy, 2004 狩野・白波瀬監訳 2008)。メンタライゼーションは精神分析と愛着理論をベースに、1990年代に境界性パーソナリティ障害の治療のために開発されたメンタライゼーションに基づく治療 (Mentalization-based therapy : MBT) の理論として考案された。「自分自身をその外側から眺めること, 他者をその内側から眺めること」により、心で心を思うこと (Holding mind in mind) とも呼ばれている (Allen & Fonagy, 2006)。メンタライゼーションは心的理論や共感性, マインドフルネスなどの既存構成概念と関連する包括的概念であるが、自己の心理状態と他者の心理状態を関連づけて「内省」を行う対自己の内的プロセスを

特に重視する点においてその独自性を持っている (Dimitrijević, et al., 2018)。また、メンタライゼーションとの互換性を持つ用語とし省察機能 (Reflective Function) もよく用いられる (Fonagy et al., 1998, 松葉他, 2022)。

メンタライゼーション理論では、メンタライゼーションには多次元性があると指摘されている。Bateman & Fonagy (2004 狩野・白波瀬監訳 2008) はメンタライゼーションに4つの次元 (黙示的-明示的, 感情-認知, 外的-内的, 自己-他者) があると主張している (Table 1)。いずれかの極に偏らずにバランスが取れたメンタライゼーションが最も有効であるとされている。このような効果的なメンタライゼーションを行うことで、自他の行動を予測し、意味づけを行い、より適応的な対人関係を構築することができる (Bateman & Fonagy, 2016)。さらに、養育者が効果的なメンタライゼーションを行うことで、子どものメンタライジング能力発達やその後の感情調節や対人関係の構築にもポジティブな影響を与えることができるとされている (Allen & Fonagy, 2006)。

## メンタライジング能力の発達

メンタライゼーションは、愛着の世代間伝達と密接な関係を持っていると考えられている (Allen et al., 2008 上地他訳 2014)。愛着とは、養育者をはじめとした特定の対象との情緒的な絆である。愛着理論では、愛着の安定性 (または愛着スタイル) は個人の生涯にわたって存続するうえ、「愛着の世帯間伝達」という親から子へ受け継がれる性質も認められている。親の愛着の安定性は親自身とその子どもの社会適応や対人関係に継続的な影響を及ぼすとされている (Bowlby, 1969, 1973, 1980 ; van IJzendoorn, 1995)。そこで、メンタライゼーションは愛着の世代間伝達をつなげる心理的な接着剤として考えられている (Allen, 2013 上地・神谷訳 2017)。その理由として、愛着が安定している親は自分の幼少期の親との関わり方に対してメンタライゼーションを行うことができ、

自分の子どもである乳児の愛着欲求と情動に関してもよくメンタライゼーションを行うことがあげられている (Fonagy et al., 1991)。このように養育者から一貫したかつメンタライジング的な関わりを受けた乳児は、幼児期・児童期において愛着の安定性および、自他にメンタライジング能力が高い傾向がある (Allen, 2013 上地・神谷 2017)。日本人大学生を対象とした研究でも、安定した愛着を持つ者は高いメンタライジング能力を有する傾向が示された (飯

干, 2013; 田中ら, 2021)。

健康的なメンタライジング能力を獲得するには、安定した愛着スタイルと養育者からのメンタライジング的な関わりが必要不可欠である。Figure 1は乳児のメンタライジング能力発達のメカニズムを示したものである (Bateman & Fonagy, 2004 狩野・白波瀬監訳 2008)。乳児は言語機能が未発達で自らの心理状態を行動、つまり情動反応として表現する。Figure 1で示されたように、乳児の情動反応を見た養育

Figure 1

メンタライジング能力発達のメカニズム

(Bateman & Fonagy, 2004 狩野・白波瀬監訳 2008を一部改変)

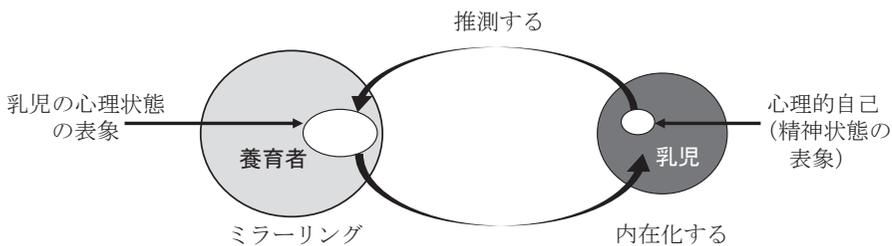


Table 1

メンタライゼーションの4次元

(Allen, 2013 上地・神谷 2017; Asen & Fonagy, 2021 崔 2024; Bateman & Fonagy, 2004 狩野・白波瀬監訳 2008 一部改変)

次元	特徴	効果的なメンタライゼーションの一例
自己	自身の心理状態を省みる	自分の行動の背後にある心理状態を理解する
↓		
他者	他者の心理状態を省みる	他者の行動の背後にある心理状態を理解する
黙示的 (自動的)	直観的・非意識的	他者の落胆に共感する際に姿勢や声の質を相手に合わせる
↓		
明示的 (制御的)	意識的・意図的	感情を言葉にして表現する
感情	感情に注意を向ける	多くの言葉を使わずに感情を理解する
↓		
認知	思考に注意を向ける	心理状態を名づけ、認識し、推理する
外的	観察可能な手がかりに注目する	他者のボディランゲージから心理状態を推測する
↓		
内的	観察不可能な心理状態を想像する	感情が顔に出ない人の心理状態を推測する

者は、行動の裏にある乳児の心理状態を推測する必要がある。その後、養育者は乳児の心理状態の表象を自分の心の中で作り、自分が推測した乳児の心理状態の表象を言語などで乳児に伝え、ミラーリングを行う。そこで、乳児は養育者によってミラーリングされた心的表象を受け取り、乳児自身の心理状態の表象として内在化することができるようになり、メンタライジング能力が育成されていくと考えられている (Bateman & Fonagy, 2004 狩野・白波瀬監訳 2008 ; 崔, 2016)。このようなメンタライジング能力発達メカニズムから、子どものメンタライジング能力の発達において、養育者自身の効果的なメンタライゼーションおよび、適切なミラーリングが必要不可欠であると考えられ

る。

一方で、メンタライジングの発達を阻害する要因として、養育者のメンタライジング能力の機能不全によるミラーリングの失敗が考えられている (Allen et al., 2008 上地他 2014)。効果的なメンタライゼーションを行えない養育者は子どもの心理状態をうまくメンタライズできないまま、実情が伴わない混乱した感情を子どもに返すことになる。子どもは養育者から本来の自分の心理状態とは異なるものを受け取り、自己の一部として内在化することで自分の正直な感情を否定する「ヨソモノ自己 (alien self)」(詳細は、Figure 2) を生み出すことになる。ヨソモノ自己を解決しないまましていると、その人の感情同定・感情制御に影響し、自己否

Figure 2

ヨソモノ自己が生まれるメカニズム

(Bateman & Fonagy, 2004 狩野・白波瀬監訳 2008 ; 崔, 2016をもとに作成)

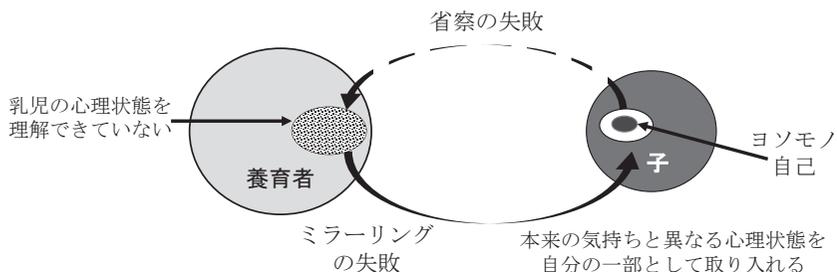


Table 2

前メンタライジングモード

(Asen & Fonagy, 2021 崔訳 2024 ; Bateman & Fonagy, 2004 狩野・白波瀬監訳 2008 ; 崔, 2016 ; 西村, 2022 一部改変)

モード	説明	行動の一例
心的等価モード	心で体験していることを、そのまま現実と捉えること。他の考え方ができず、思ったこと＝現実と確信するモード。	夢、フラッシュバックを体験、妄想状態など
ブリテンド・モード	心的世界が、現実と切り離されているものとして説明され、表現としての言葉と心の実情が繋がっていないモード。	内省的な言葉を用いている一方、自傷的な行動をやめない。
目的論的モード	言葉などの明示的な心的表象ではなく、目標に向けた行動で心的状態を表現するモード。	極度の情緒的な苦痛を伝えるために自傷する

定や自傷傾向にもつながる (Bateman & Fonagy, 2004 狩野・白波瀬監訳 2008；崔, 2016)。

メンタライゼーションの未発達の状態は「前メンタライジングモード」と呼ばれている。前メンタライジングモードは、「心的等価モード (心で思ったことが現実だと思ひ込む)」、「プリテンドモード (心的世界を現実から切り離して考える)」、「目的論的モード (心理状態はすべて物理行為によってのみ心理状態が解決されると思ひ込む)」の3つがあり (Bateman & Fonagy, 2004 狩野・白波瀬監訳 2008；崔, 2016), その詳細は Table 2 に示されている。メンタライジング能力の発達過程では、乳児は前メンタライジングモードを経て、4歳頃から健康なメンタライジングモードに入る。しかし、ヨソモノ自己の存在や養育環境不全などにより、幼児期以降も前メンタライジングモードに留まり続ける人は、自己理解や対人関係において問題を抱えるリスクが高いとされている (Bateman & Fonagy, 2004 狩野・白波瀬監訳 2008；崔, 2016)。

### 成人期のメンタライゼーション

成人期のメンタライジング機能不全は感情調整障害をはじめ、対人関係の問題や対人行動調整の困難さとの関連が指摘されている。前メンタライジングモードにある人は、自己と他者の感情や行動の意図などを理解する能力に限られている (Midgley et al., 2017)。そのため、自他に対する感情同定または感情表出や、対人関係における行動調節を行うことに困難を抱えやすい。日本人を対象とした研究では、青年期・成人期のメンタライジング能力の低さは、抑うつ、不安、自責傾向、アイデンティティの混乱や自己構築の問題などと関連が報告されている (松葉他, 2019；柴田, 2024；山口, 2012)。

また、成人養育者を対象とした研究では、メンタライゼーションよりも、互換性のある「省察機能」という用語が用いられる場合が多い。省察機能はメンタライゼーションと同様、自己

と他者両方に対して行われる。省察機能の高い親は自身と子どものポジティブ、ネガティブな感情を幅広く読み取ることができ、かつ適切に理解・対処する能力も高いため、親子間の情緒的コミュニケーション、子どもの情動調整との関連も指摘された (濱田, 2010；岡藤, 2009；田邊・米澤, 2009)。さらに、省察機能に類似した概念である「セルフモニタリング」、「自己洞察」に関する研究でも、それらの機能改善により、養育者自身の情緒の安定や養育態度の改善、子どもに対する肯定的な受け止めができるようになるといったような親子関係における肯定的な変化が報告されている (金子, 2008；安川・高宮, 2005)。

以上のことから、成人期のメンタライジング能力はその人自身の精神的健康と対人関係にとどまらず、養育者の場合、親子関係や子どもの情動調整の発達にも重要な影響を及ぼしていると考えられる。いずれも成人期のメンタライジングの機能向上の重要性を示唆している。そこで、次の章では成人期のメンタライジングの機能向上に対する心理的支援の現状について検討したい。

### 成人期のメンタライジング機能向上に対する心理的支援の現状

メンタライジング機能向上に対する心理的支援として、メンタライゼーションに基づく治療 (Mentalization based Treatment : MBT) をはじめ、多くの介入方法が開発されてきた。メンタライゼーションに基づく治療は、境界性パーソナリティ障害 (以下 BPD) によるメンタライジングの機能停止を改善するために開発され、その後は児童 (Mentalization based Treatment for Children : MBT-C), 青年 (Mentalization based Treatment for Adolescents : MBT-A), 家族 (Mentalization Informed Systemic Therapy : MIST), 集団 (Mentalization based Treatment for Group : MBT-G) など、より対象者の特性に

合うような介入も展開され、臨床実践においてメンタライジングの機能改善に対する有効な心理療法として活用されている。また近年では、メンタライゼーション理論に基づいた養育者の省察機能向上を目的としたプログラムも注目されるようになってきている。本章では、成人期のメンタライジング機能向上の心理的介入として、MBTとメンタライゼーションを活用したシステム療法 (Mentalization Informed Systemic Therapy : MIST, または Mentalization based Treatment for Family : MBT-F と呼ばれる) に加え、養育者の省察機能向上のためのプログラムとして、Mothering from the Inside Out (MIO), Parents First, 親子の絆を深めるプログラムを概観する。

### メンタライゼーションに基づく治療

#### (Mentalization based Treatment : MBT)

メンタライゼーションに基づく治療 (以下 MBT) は、メンタライジングの機能向上を目標とした個人対話セッション形式の心理療法であり、12~18か月間でクライアントの効果的なメンタライジングの促進を図る (Bateman & Fonagy, 2004 狩野・白波瀬監訳 2008)。MBTセラピストは、「Not Knowing (不知の姿勢)」と柔軟なメンタライジングの姿勢を保ってクライアントの体験を共に振り返ることが大切とされている。その姿勢を前提に、(a) 共感・支持・動機づけ、(b) 明確化・描写・チャレンジ、(c) 基本的メンタライジング、(d) 解釈的メンタライジング (e) 転移のメンタライジングといった5つのステップを踏まえて支持的な介入から探索的な介入へ展開する (崔, 2016)。その際に、中心的な介入として、(a) 覚醒度を調整する、(b) 前メンタライジングモードの同定をする、(c) 共感的にクライアントを承認、受容する、(d) メンタライジングを回復するための介入をする、(e) メンタライジングの構成要素の育成が行われる (Bateman & Fonagy, 2004 狩野・白波瀬監訳 2008)。これらの介入スキルをベースに、セラピストはクラ

イエントの体験について共に考察したり、フィードバックを提供したりすることで、クライアントが自分や他者の心理状態を考えられるようにサポートする。このように、明示的にスキル、洞察、説明を提供する代わりに、共同作業を通してクライアントのメンタライジングを促していく (崔, 2016)。

MBTはBPDをはじめ、多くのパーソナリティ障害 (例えば、反社会性パーソナリティ障害) や精神疾患 (例えば、薬物依存、不安障害、摂食障害など) の改善に有効であることが研究によって明らかになっている。例えば、ランダム化比較試験 (Randomized Controlled Trial : RCT) において、MBT群の参加者は標準治療群よりも、自殺・自傷傾向や精神症状に有意な改善が見られた (Bateman & Fonagy, 1999)。そのうえ、MBT群の参加者は、治療後18か月、36か月、および8年で自殺傾向の低下、入院率の減少、および社会的スキルの向上が示された (Bateman & Fonagy, 1999, 2004 狩野・白波瀬監訳 2008)。また、外来患者に対するMBTランダム化比較試験では、6か月、12か月、および18か月で評価したところ、自傷・自殺傾向、入院率においてMBT群は対照群よりも有意に低いと報告された (Bateman & Fonagy, 1999, 2016 ; Fonagy & Bateman, 2009)。また、他の研究ではMBTの介入により、不安や抑うつなどの精神症状においても改善が見られたことも指摘されている (Bales et al., 2012, 2015)。

#### メンタライゼーションを活用したシステム療法 (Mentalization Informed Systemic Therapy : MIST)

メンタライゼーションを活用したシステム療法 (以下 MIST) は、Asen & Fonagy (2021 崔訳 2024) によって開発された「システム論的な取り組みの構造および、メンタライジングの概念と技法の両方を有する」心理療法である。メンタライジング機能が改善されることによって家族メンバーが家庭内問題の解決策を見出す

能力も向上されることを前提に、セラピストと家族との共同作業が行われている (Rossouw 2012 ; Midgley et al., 2017)。MIST では、メンタライジングに (a) 自己に対するメンタライジング、(b) 他者に対するメンタライジングに加えて、(c) 関係性メンタライジング (relational mentaling) という3つの主要な分野におけるメンタライジングを重要視している (Asen & Fonagy, 2021 崔訳 2024)。関係性に対するメンタライジングとは、家族や他のグループで共有される思いと定義されており、「ともにそれに心を配る (Jstít : jointly seeing to it)」とも表現されている (Asen & Fonagy, 2021 崔訳 2024)。この3つの側面のメンタライジング機能をバランスよく促進することが目的である。

MIST のセッションはカップル、または家族メンバー全員の参加が望ましい。セッションの中で、セラピストは家族メンバーの思考や感情を共感的に受容しつつ、それぞれの思考や感情、それらが家族間の相互作用に及ぼす影響に

ついて説明し、行動ではなく心理状態に注目するように促す (Keaveny et al., 2012 ; Rossouw, 2012)。その次に、セラピストはメンタライジング・ループ (Figure 3) に沿って家族メンバーの非メンタライジングパターンを特定し、家族がその瞬間をメンタライズできるようにサポートし、家族全員が納得できるまでその作業を繰り返す。最終的にセッションで行われた効果的な家族内のメンタライゼーションが日常生活へ一般化することを目指す (Bleiberg, 2013)。メンタライジング・ループ以外にも、家族の効果的なメンタライジングを活性化させるために、さまざまなエクササイズやゲーム (Table 3) が提案されている (Asen & Fonagy, 2021 崔訳 2024)。カップルや家族、あるいは複数の家族間でエクササイズやゲームに取り組むことにより、各側面のメンタライジングが強化、活性化されることが期待できる。また、Asen & Fonagy (2021 崔訳 2024) によれば、エクササイズやゲームの多くはセッション以外の時間にもできるように設計されており、

Figure 3  
メンタライジング・ループ (Asen & Fonagy, 2021 崔訳 2024 ; Bleiberg, 2013を一部改変)

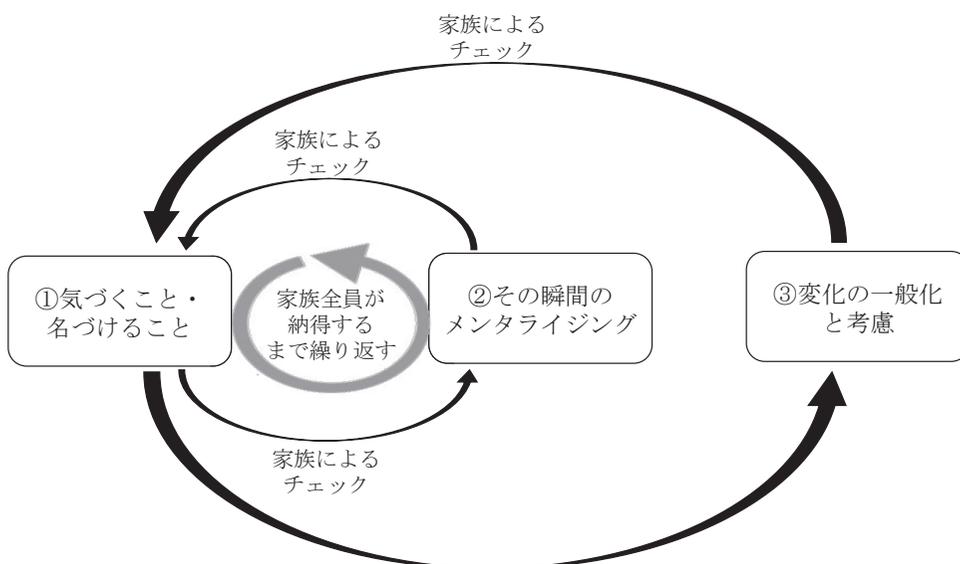


Table 3  
効果的なメンタライジングの側面と介入の候補 (Asen & Fonagy, 2021 崔訳 2024を一部改変)

	側面	介入	内容	注目点
自己に対するメンタライジング	心理状態への注目	感情のボディ・マップ	家族成員それぞれが特定の感情を身体のとどこで感じるかを探り、「ボディ・マップ」上に描きこむ。	参加者の個人や家族ごとに、特定の感情が現れる場所の特徴、相違、それを踏まえた気づき
	感情と思考を区別する能力	人生の円	参加者一人一人が人生の重要な側面(家族、友人、知人、仕事、趣味、信仰、希望、恐れなど)それぞれを円にして、1枚の紙に描く。	絵を見返したときに意外な部分、満足度、変化してほしい点とその詳細
	自己探求的な熟考と省察	感情のスナップ写真	セッション中に家族メンバー一人ひとりの写真を撮り、その写真を見返し、撮られたときの各メンバーの心境を全員で推測する。	写真に現れた情動とその理由、推測の正しさとその原因
	情動をマネージする	気分のバロメーター	参加者各自が自分の気分と全般的な感情状態について、現状と望ましい状態との両方で評価する。	家族内で他人の感情に気づいてる、気づいていないメンバーとその理由・対策
他人に対するメンタライジング	視点交代	粘土で作る家族の像	参加者一人一人が粘土を使って自分の家族の像を作り、その後発表する。	像の中で最も気になるもの、最初に変化しそうなもの、問題や病気の位置
	視点的な視点	他人の視点に立つ	家族やグループメンバーは輪になって座り、他の人のいた場所に立って、その人になったと想像して、話し合いを続ける。	他人の視点から見た問題の見え方、その人の考え方
	好奇心	凍りついた彫刻	家族成員の1人が家族内の問題について考え、他の家族成員を使って、凍りついた彫刻として表現する。作成者以外の人がその問題を当て、彫刻を作り直すことで解決策を考える。	彫刻を通して表現された問題・感情・力動、彫刻の「変更点」とその影響
	発達の視点	写真がうつす物語	家族歴史がわかる写真を7枚選び、次のセッションの際に持参する。	選ばれた、選ばれなかった写真の内容とその理由、写真に関する記憶の共有
関係性メンタライジング	共同志向性	家族のリュックサック	次の飛行機で海外旅行に行かないといけないのに、家族全員で1つのリュックサックに5つの物品しか持たないことを前提に、必ず持たなければならないものを家族で相談して決める。	物品が選ばれた、選ばれなかった理由、決定権を握るメンバー、喪失感の対処
	変化の可能性を信じる	対立地図	参加者に日常生活中对立が起きる場所(自宅・近所・学校等)の地図を書いてもらい、対立が起きる場所に赤い目印をつける。	対立が起きがちな場所とその理由、対立を解決するための対策
	共同観点の受容	人間関係の地図	家族成員各自が家族内のさまざまな関係を、記号を使って「人間関係の地図」を描く。	関係の良し悪しとその程度、時間経過による変化の有無、家族間の地図の相違
	不知の姿勢	他人は私をどう見ているか	家族成員の1人が「家族から見た自分がどう見られているか」を推測して書き、その後他の家族成員が実際にその人に対するイメージを描く。	参加者自身の推測と実際に他の家族成員が持つイメージの相違
相互にやり取りする能力	家族の絵	家族全員で現在の自分の家族の姿を1本のペンで共有しながら描く。その後、6カ月後に「こうなってほしい」と願う家族の姿も描く。	家族の協力度合い、主導権を握った者、最も多く発言した者	

参加者たちがセッション以外の時間でも活用することが理想的であるとされている。

### Mothing from the Inside Out (MIO)

Mothing from the Inside Out (以下 MIO) は、MBT モデルに基づいて開発された介入プログラムである (Allen et al., 2008 土地他訳 2014 ; Suchman & Bers, 2015)。MIO は主に5歳までの子どもの母親のメンタライジング機能向上と親子の相互作用の改善を目的としている。介入プログラムは12回の個別対話セッションからなり、各セッションのテーマは事前に設定されず、その日に扱う話題は参加者である母親によって決められる (Suchman & Bers, 2015)。セラピストは、育児中のストレスフルな状況や親の省察機能が問われるような場面において、母親自身やその子ども、周囲の他者の考え、感情、意図などについて母親と共に振り返り、省察できるようにサポートする。(a) 治療同盟、(b) メンタライジングの姿勢、(c) 母親自身に対するメンタライゼーション、(d) 子どもに対するメンタライゼーション、(e) 愛着に基づいた発達支援といった5つの中核要素に基づいて介入が行われる。プログラムを通して、母親の感情調節能力の発達、人間への愛着に関与する能力の回復 (例えば、物質への依存を子どもへの愛着に置き換える)、子どもへのメンタライジング的な考えと関わり (例えば、子どもの感情的苦痛を受容し、子どもの感情的ニーズを理解する、または子どもの健全な発達を調節する能力に対してサポートする) を促進することが目的となっている (Lowell et al., 2021)。

MIO には一定の科学的根拠が蓄積されている。例えば、ランダム化比較試験において、MIO による介入群の母親は心理教育的介入群の母親よりも、省察機能に有意な改善を示し、6週間～12ヶ月の追跡調査でも継続的な効果が示された。また、MIO への参加は、母親の依存症の改善、再発リスク軽減の他、抑うつや不安、一般的な精神的苦痛の軽減にも関連している

(Suchman et al., 2008, 2010, 2011, 2017)。さらに、母子間の相互作用や子どもの精神的表現の改善との関連も指摘された (McMahon, 2014 ; Suchman et al., 2011, 2017)。

### Parents First

Parents First (Goyette-Ewing et al., 2003 ; Grienerberger et al., 2004) は、養育者の省察機能の向上に焦点を当てた予防的な心理教育的プログラムである。任意参加の乳児から未就学児までの子どもを持つ養育者を対象とし、12週間にわたって週1回のグループ介入を行う (Slade, 2002 池田訳 2011)。Parents First のプログラムは省察機能の発達モデルに基づき、(a) 子どもの行動を観察し、行動の背景にある感情・思考・欲求を知る、(b) 自身と子どもの心の相互関連性について考える、(c) 心の相互関連性という概念を補足し、自身と子どもの心の独立性について考える、(d) 親子関係における複雑な省察過程について体験する (例えば、アンビバレントな気持ちの存在、相手の意図の誤解釈) といった4つのステージに沿って段階的に省察機能の発達を促進することを目指している (今里, 2021 ; Slade, 2005)。プログラムは、参加者同士の話し合いや心理教育の他に、援助者による対応方法の教授過程中に参加者自身による実践・評価・対応方法の再検討を繰り返す行方といった内容も取り込まれている。参加者は効果的な省察プロセスを体験することにより、自身と子どもの行動の動機付けとなる情動を認識・応答できるようなスキルに加え、他者の感情を理解することの難しさを体感的に知ることが可能とされている (Slade, 2002 池田訳 2011)。

Parents First に関して、詳細な介入内容に文献では明らかにされていない部分はあるものの、Slade et al. (2005) の研究では、プログラムに参加することにより、養育者の省察機能向上が報告された。さらに、子どもの愛着の安定性も高く、「無秩序型」に当たるものはいなかった。

Table 4

親子の絆を深めるプログラム (今里, 2021)

	形式	テーマ	介入内容
第1回	講義形式	「内省機能ってなに？」	1. アンケート調査 2. 内省機能の概念が内省機能を促進・発達させる条件 3. 今後のプログラム予定
第2回	訓練 モジュール	「『自分』と『子ども』の ころろに気づく」技術を 獲得する	エクササイズ1. 感情をホットポテトにするゲーム エクササイズ2. ビデオ素材（親子のやり取り） 自分の気持ちを観察して耐える a) 自分の気持ちに気づく技術と訓練 b) 感情について物語る エクササイズ3. ビデオ素材（親子のやりとり） 子どものころろに関心を向ける態度 a) 子どもの行動の模倣 b) 有標的で随伴的な応答 課題：安全基地を作り子どもの行動を模倣し自身と子どものころろ に関心を向ける
第3回	訓練 モジュール	「『自分』と『子ども』の ころろは異なることに気 づく」技術を獲得する	エクササイズ1. 課題（動画）を振り返る（シェアリング） （講義） 1. 代わりの見方の探索 2. 非内省的な姿勢（指標） 3. 適切な表出 エクササイズ2. 適切な表出（ロールプレイ） エクササイズ3. 課題動画素材（親子のやりとり） 心理状態の相互交流を振り返り探索 課題：養育者—子ども関係の中で内省機能促進的なやりとりの体験 と記録と振り返り
第4回	訓練 モジュール	「自他の感情に焦点を当て、 名前を付ける」技術を獲得 する	エクササイズ1. 課題（動画）を振り返る（シェアリング） 一時停止しながらやりとりの背景にある心理状態の確認と振り返り エクササイズ2. 課題をロールプレイし、対応について探索する （講義） 1. 感情の焦点化と名付け 2. 内省機能促進応答技法は積極的に 3. まとめ 4. ポストアンケート調査

### 親子の絆を深めるプログラム

親子の絆を深めるプログラムは、今里 (2021) が Parents First の基本概念を参考にし、独自に開発された養育者の省察機能の向上を目的としたプログラムである。親子の絆を深めるプログラムの独自性は、子育てにおける養育者の省察の3層モデル（「親自身に関する省察」「子どもに関する省察」「他者を通しての省察」）に沿って具体的に養育者が「探索的に自他認識」できる内容に特化した部分にある（今里, 2021）。親子の絆を深めるプログラムは0～4歳の乳幼児の養育者を対象とし、4週間にわたる週1回のグループ介入セッションからなる。プログラムは、1回の講義形式セッションと3回のエクササイズ

形式セッションに加え、セッション後のホームワークが2回含まれる（今里, 2021）。各セッションの具体的な介入内容は Table 4 に示されている。

親子の絆を深めるプログラムの有効性を検討する量的研究では、6名の母親を対象に調査したところ、プログラム前後の比較では、養育省察における「省察の失敗」の得点の低減および、育児感情における「子どもの態度・行為への負担感」「育て方への不安感」得点の低減が報告された（今里, 2021）。

## メンタライジングの機能向上に対する 新たな介入方法の可能性

これまでのメンタライジングの機能向上に対する心理的介入を概観したところ、(a) 語りを通して機能向上をサポートする言語的なアプローチと、(b) 体験を通して機能向上を図る体験的なアプローチの2種類に分類することが可能であると考えられる。MBT と MIO は直接的なスキル提供よりも、セラピストとの言語的なやり取りの中でクライアント自身がメンタライジングできるように探索することを重視するため (Bateman & Fonagy, 2004 狩野・白波瀬監訳 2008 ; Suchman & Bers, 2015), 言語的なアプローチとして考えられる。一方で、MIST, Parents First や親子の絆を深めるプログラムは、エクササイズや心理教育などを通して、より体験的・明示的にメンタライジングの機能向上を図っているため (Asen & Fonagy, 2021 崔訳 2024 ; Goyette-Ewing et al., 2003 ; Grienenberger et al., 2004 ; 今里, 2021), 体験的なアプローチとして考えられる。

言語的なアプローチと体験的なアプローチのどちらもメンタライジングの機能向上や対人関係・親子関係の改善に対して有効であると考えられてきた一方、言語と体験という2つのアプローチを両立する難しさや臨床実践における問題が指摘されている。MBT は日本でもある程度確立されているものの、日本人を対象とした実証研究が少なく、質的研究や事例検討の段階に留まっている (荒井, 2022 ; 石谷, 2019)。また、MIST, MIO, Parents First は欧米を中心に展開され (Asen & Fonagy, 2021 崔訳 2024 ; Goyette-Ewing et al., 2003 ; Grienenberger et al., 2004), 日本での実施事例や日本人を対象とした研究データがほとんどない。それに対して、親子の絆を深めるプログラムは日本人研究者によって開発されたものの、その有効性について研究は1件の量的研究のみのため (今里, 2021), 臨床実践に向けたエビデンスが不足していることが明らかとなっ

た。以上のことから、日本ではメンタライジングの機能向上への効果的な治療法はまだ確立されていないと考えられる。

これまで行われてきた心理的介入の2つのアプローチに加え、メンタライジングの発達は愛着関係と養育者の養育行動にも深く関連していることから、家族的な視点からのアプローチの必要性も示唆される。そこで、家族療法の1つである家族造形法 (Family Sculpture) は、家族的な視点を持つ体験的なアプローチであり、さらに家族間の言語的なコミュニケーションを促進する効果も示唆されている。そのため、メンタライジング機能向上に対する心理的介入としての効果が期待できる。本章では、メンタライジングの機能向上に対する心理的介入として家族造形法を提案する。

### 家族造形法 (Family Sculpture) とは

家族造形法 (Family Sculpture) は、空間に家族メンバーを彫像として配置することにより、家族の心理的距離感や情緒的な関係性といった相互作用パターンを立体的・物理的に可視化する家族療法の一技法である (堀江・興津, 2014)。1960年代後半にサイコドラマの背景を持つ Kantor によってアメリカで確立され、その後体験学派家族療法家の Duhl, Papp, Satir によって広められてきた技法である (Bischof & Helmeke, 2005 ; 興津・早樫, 2012)。そのため家族造形法は、家族療法的な視点を持ちながら体験的なアプローチを行う技法とされている。また、家族関係を語りではなく、直接的に観察し、介入できることから診断的な側面と治療的な側面両方を備え、アセスメント技法と介入技法として用いられている (Bischof & Helmeke, 2005 ; Constantine, 1978 ; 鈴木他, 1986)。

家族造形法の実施においては、3~4人以上の参加が望ましいとされ、以下のように造形を進める。まず、家族メンバーの中から、家族のイメージや風景を造形する「彫刻家役」を1人選出し、その人から見た家族イメージや風景を造

形する。具体的には、進行役（セラピスト）の進行に従い、他の家族メンバーを粘土のかたまりと認識し、1人ずつ順番に配置する。なお、その場に不在の人物の代わりに椅子などで代用することも可能である。造形する際に、彫刻家役の人は自分を含めた家族メンバーの姿勢、視線、表情や空間的な位置を決め、手で触れながら配置する。全員の配置が完了したら、その場で1分程度静止し、それぞれ自身の感情や気持ち、身体感覚に集中する。その後、静止中にどのような感情や身体感覚を感じたかについてお互いにフィードバック（Feedback：FB）する（早樫, 2010a；平木・中釜, 2006）。また、造形のバリエーションとして、家族のイメージ以外にも、造形中に他の家族と役割交代をしたり、理想の家族関係を造形したり、彫刻家を交代して造形することなどのやり方もある（早樫, 2010b）。

家族造形法の特徴として、まず、人間というシンボルを用いて非言語的コミュニケーションを通して家族関係を表現することがあげられる。平木・中釜（2006）によると、身体を彫像に見立てた非言語なコミュニケーションによって家族関係を表現することで、家族による過度の言語化、知性化、防衛、非難を排除することができる。そのことにより、参加家族とセラピスト両者とも、ありのままの家族システムにより近いものを観察・理解できる。そのうえ、造形に表現された家族に参与するという体験的過程から家族メンバーは家族内の対人関係を、「今、ここで」の面接空間と実際の家族メンバーの体を用いて視覚・具体的に示すことによって、非言語的な情緒体験ができ、家族間の相互認知を深めることができる（Constantine, 1978；早樫, 2011）。

また、家族造形法のもう1つの特徴として、家族という緊密な関係から個人を切り離し、それぞれの経験の個別性を観察・説明できることがあげられている。家族の彫像を作る際に、参加者は家族を独立した個人によって作られた1つのユニットとして捉えることで、それぞれの

家族は独立した個人であるうえ、そのユニットの重要な一部であるように考えることができる（Bischof & Helmeke, 2005）。このように、家族造形法では、家族全体を対象としながらも、家族メンバー各々の個人的な経験を抽象化することが求められ、家族メンバーそれぞれの個人の体験も重要視されている。このことにより、家族メンバー間の癒着が家族に及ぼす影響を明かすこともできるとされている（Bischof & Helmeke, 2005；平木・中釜, 2006）。

### 家族造形法の活用

家族造形法は上記の特徴を活かして心理的介入方法以外にも、事例検討や家族療法家育成のためのトレーニングとしても活用されている。例えば、婚前カップルを対象に行うカウンセリングの中で家族造形法を用いることにより、それぞれの原家族における問題解決スタイル、価値観、または原家族の関係を理解するのに有効であったと報告されている（Lesage-Higgins, 1999）。その他にも、家族療法家のためのトレーニングプログラムにおいて、学生が原家族に対する造形を通して自身の原家族との関係において洞察を得るという自己覚知（自己理解や自分の感情状態への気づきの程度）や原家族に対する気づきを促進する効果を実証されている（Coppersmith & Giarasso, 1978；Costa, 1991；Lawson, 1988）。いずれも、自己理解および家族理解を促進する効果があると示唆されている。

### 成人期のメンタライジング機能向上における家族造形法の可能性

家族造形法は、参加者が自身の家族関係について振り返って造形を行うことにより、参加者の自己・他者に対するメンタライゼーションを促進させる効果が期待できると考えられる。メンタライゼーション理論において、自身の感情に注目し、内在化することは、効果的な自己に対するメンタライゼーションを行うのに重要であるとされている（Bateman & Fonagy,

2004 狩野・白波瀬監訳 2008)。造形では、言語表現を排除した「家族の彫像」を用いて家族関係を表現し、さらに静止する時間を設けることにより、そこから生じた身体的・情緒的感覚に注意を向けることが可能である（平木・中益, 2006)。また、造形後のフィードバックの際に自分の感情や思いを率直に言語化することにより、感情の理解と内在化が促進されることが考えられている（早樫, 2010b)。以上のことから、造形中に「今、ここで」の体験に注目し、味わうことは参加者の自己に対するメンタライゼーションを促進することが可能であると考えられる。

また、他者に対するメンタライジング能力を向上させるには、他者行動の背後にある感情状態に注目し、共感することが重要である (Bateman & Fonagy, 2004 狩野・白波瀬監訳 2008)。造形完成後のフィードバックでは、家族メンバーはそれぞれの発言について考え、確かめ合うことができる。その際に他の家族の視点からの語りを聞くことにより、他の家族の視点から考えるという内省や、他の家族メンバーへの共感が促進される（早樫, 2010b；鈴木田他, 2020)。同様に、MIST では、他者に対するメンタライジングを向上させるために他者の立場に立って問題を考えるエクササイズ（「粘土で作る家族の像」や「他人の視点に立つ」）が考えられている (Asen & Fonagy, 2021 崔訳 2024)。また、サイコドラマにおける役割交代 (role reversal) は、他者の立場に立つことを直接的に体験することができ、他者への共感性を促進することができる (Blatner, 1994)。このことから、造形中に行われる役割交代も同様に他者視点を獲得する効果があると考えられる。したがって、造形後のフィードバックや造形中に役割交代を行うことで、他者の心理状態に対する理解・共感が可能となり、他者に対するメンタライジングが促進されると推測できる。

以上のことから、成人期のメンタライジング機能向上に対する家族造形法の介入可能性が示唆できる。メンタライジング能力の発達メカ

ニズムに基づき (Bateman & Fonagy, 2004 狩野・白波瀬監訳 2008)、成人期のメンタライジング能力の発達不全に対する家族造形法の作用機序は Figure 4に示されている。

家族造形法による介入は、成人期のメンタライジング機能向上に限らず、メンタライジング能力発達不全の世帯間伝達を断ち切ることへの効果も期待できる。家族造形法による介入を通して、自身の感情に対する気づき、理解および自己に対するメンタライジングを促進させることができる。このことにより、ヨソモノ自己の影響が低減し、参加者は自身のありのままの感情を認め、内在化できるようになる。また、家族造形法による介入は参加者とその子どもの親子関係や子どものメンタライジング能力の発達に対する促進効果もあると考えられる。他者に対するメンタライジングが促進されると、養育者になった際に子どもの心理状態を正しく省察することが可能となり、その子どもの健康的なメンタライジング能力の発達を支えることができる。このように、家族造形法は成人期のメンタライジング機能向上に対する有効な心理的介入であると考えられる。

ただし、日本では家族造形法はあまり浸透しておらず、実証的な研究も数少ない。家族造形法は感情や体験といったような曖昧なものを扱うことができる一方、効果測定の困難さも指摘されている (Bischof & Helmeke, 2005；早樫, 2010a)。そのため、技法に関する実証的な研究が少ないことが問題点として挙げられる。日本の研究では、造形中における対養育者の距離と実際の心理的距離との関連や、原家族の造形または家族造形法による事例検討を実施することで、家族理解度の改善が見られたことも報告された (堀江・興津, 2014；興津・早樫, 2012；鈴木田他, 2020)。しかし、参加者自身の感情理解やメンタライジング機能に対する効果はまだ検討されていない。よって、成人期のメンタライジング機能における短期・長期的な改善について検討していく必要がある。



早樫, 2012; 鈴木田他, 2020)。したがって、造形中における感情や体験に関する測定尺度の開発が必要不可欠である。

最後に、成人期のメンタライジング機能向上に対する家族造形法の効果検討のために量的研究またはランダム化比較試験 (RCT) による検証が必要である。これまで家族造形法に対する実証的な研究がほとんどないことから、実験による効果検証とエビデンスの蓄積が必要とされている。

以上の3点に留意しつつ、成人のメンタライジングに対する家族造形法の実際の介入効果について検討するために、さらなる研究が必要である。

## 文 献

Allen, J. G. (2013). *Restoring Mentalizing in Attachment Relationships: Treating Trauma with Plain Old Therapy*. American Psychiatric Publishing.

(アレン, J. G. 上地 雄一郎・神谷 真由美 (訳) (2017) 愛着関係とメンタライジングにおけるトラウマ治療——素朴で古い療法のすすめ—— 北大路書房)

Allen, J. G., & Fonagy, P. (Eds.). (2006). *The Handbook of Mentalization-Based Treatment*. John Wiley & Sons, Ltd. <https://doi.org/10.1002/9780470712986>

Allen, J. G., Fonagy, P., & Bateman, A. W. (2008). *Mentalizing in clinical practice*. American Psychiatric Publishing Inc.

(アレン, J. G., フォナギー, P., & バイトマン, A. W. 狩野 力八郎 (監修) 上地 雄一郎・林 創・大澤 多美子・鈴木 康之 (訳) (2014). メンタライジングの理論と臨床——精神分析・愛着理論・発達精神病理学の統合—— 北大路書房)

荒井 真太郎 (2022). メンタライジングの観点からの心理療法過程の理解 佛教大学臨床

心理学研究紀要, 27, 35-45.

Asen, E., & Fonagy, P. (2021). *Mentalization-based treatment with families*. The Guilford Press.

(アーゼン, E., & フォナギー, P. 崔 炯仁 (訳) (2024). メンタライゼーションによる家族との治療——〈システム〉・〈関係〉へと展開するメンタライジングアプローチ—— 星和書店)

Bales, D., Beek, N. van., Smits, M., Willemsen, S., Busschbach, Jan J. V., Verheul, R., & Andrea, H. (2012). Treatment Outcome of 18-Month, Day Hospital Mentalization-Based Treatment (MBT) in Patients with Severe Borderline Personality Disorder in the Netherlands. *Journal of Personality Disorders*, 26 (4), 568-582. <https://doi.org/10.1521/pedi.2012.26.4.568>

Bales, D, L., Timman, R., Andrea, H., Busschbach Jan J. V., Verheul, R., & Jan H. Kamphuis. (2015). Effectiveness of Day Hospital Mentalization-Based Treatment for Patients with Severe Borderline Personality Disorder: A Matched Control Study. *Clinical Psychology and Psychotherapy*, 22 (5), 409-417. <https://doi.org/10.1002/cpp.1914>

Bateman, A., & Fonagy, P. (1999). Effectiveness of partial hospitalization in the treatment of borderline personality disorder: A randomized controlled trial. *The American Journal of Psychiatry*, 156 (10), 1563-1569. <https://doi.org/10.1176/ajp.156.10.1563>

Bateman, A., & Fonagy, P. (2004). *Psychotherapy for Borderline Personality Disorder: Mentalization-Based Treatment*. Oxford University Press.

- (バイトマン, A., & フォナギー, P. 狩野 力八郎 白波瀬 丈一郎 (監訳) (2008). メンタライゼーションと境界パーソナリティ障害——MBT が拓く精神分析的療法の新展開 岩崎学術出版社)
- Bateman, A., & Fonagy, P. (2016). *Mentalization-based treatment for personality disorders: A practical guide*. Oxford University Press.
- Bischof, G. H., & Helmeke, K. B. (2005). Family sculpture procedures. In M. Cierpka, V. Thomas, & D. H. Sprenkle (Eds.), *Family assessment: Integrating multiple perspectives*. (Vol.13) Hogrefe & Huber Publishers, 257-281.
- Blatner, A. (1994). Psychodramatic methods in family therapy. In C. E. Schaefer & L. J. Carey (Eds.), *Family play therapy* (pp.235-246). Jason Aronson.
- Bleiberg, E. (2013). Mentalizing-based treatment with adolescents and families. *Child and Adolescent Psychiatric Clinics of North America*, 22 (2), 295-330.  
doi:10.1016/j.chc.2013.01.001.
- Bowlby, J. (1969). *Attachment and loss*. (Vol. 1). Attachment. Basic Books.
- Bowlby, J. (1973). *Attachment and loss* (Vol. 2). Separation. Basic Books.
- Bowlby, J. (1980). *Attachment and loss*. (Vol. 3). Loss. Basic Books.
- 崔 炯仁 (2016). メンタライゼーションでガイドする外傷的育ちの克服——〈心を見わたす心〉と〈自他境界の感覚〉をはぐくむアプローチ—— 星和書店
- Constantine, L. L. (1978). Family sculpture and relationship mapping techniques. *Journal of Marital and Family Therapy*, 4, 13-23.
- Coppersmith, E., & Giarasso, D. (1978). Family sculpting in a counselor education program. *Counselor Education and Supervision*, 17, 306-310.
- Costa, L. (1991). Family sculpting in the training of marriage and family counselors. *Counselor Education and Supervision*, 31, 121-131.
- Dimitrijević, A., Hanak, N., Altaras Dimitrijević, A., & Jolić Marjanović, Z. (2018). The Mentalization Scale (MentS): A self-report measure for the assessment of mentalizing capacity. *Journal of Personality Assessment*, 100 (3), 268-280.  
<https://doi.org/10.1080/00223891.2017.1310730>
- Fonagy, P., & Bateman, A. W. (2009). Mentalization-based treatment of borderline personality disorder. In J. M. Oldham, A. E. Skodol, & D. S. Bender (Eds.), *Essentials of personality disorders* (pp. 209-233). American Psychiatric Publishing, Inc.
- Fonagy, P., Steele, M., Steele, H., Moran, G. S., & Higgitt, A. C. (1991). The capacity for understanding mental states: The reflective self in parent and child and its significance for security of attachment. *Infant Mental Health Journal*, 12 (3), 201-218.  
[https://doi.org/10.1002/1097-0355\(199123\)12:3<201::AID-IMHJ2280120307>3.0.CO;2-7](https://doi.org/10.1002/1097-0355(199123)12:3<201::AID-IMHJ2280120307>3.0.CO;2-7)
- Fonagy, P., Target, M., Steele, H., & Steele, M. (1998). *Reflective Functioning Manual Version 5*. University College London.
- Goyette-Ewing, M., Slade, A., Knoebber, K., Gilliam, W., Truman, S., & Mayes, L. (2003). Parents First: A developmental

- parenting program. Yale Child Study Center. Unpublished manuscript.
- Grienerberger, J., Popek, P., Stein, S., Solow, J., Morrow, M., Levine, N., & Lehman, J. (2004). The Wright Institute reflective parenting program workshop training manual. The Wright Institute; Unpublished manual.
- 濱田 潤子 (2010). 子どものネガティブ感情表出に対する母親の対処法と内省機能との関連 ヒューマンサイエンス, 13, 101-103.
- 早樫 一男 (2010a). 家族造形法の深度 (2) 対人援助マガジン, 2, 80-82.
- 早樫 一男 (2010b). 家族造形法の深度 (3) 対人援助マガジン, 3, 90-96.
- 早樫 一男 (2011). 家族造形法の深度 (4) 対人援助マガジン, 4, 97-106.
- 平木 典子・中釜 洋子 (2006). ライブラリ 実践のための心理学3 家族の心理——家族への理解を深めるために—— サイエンス社
- 堀江 幸代・興津 真理子 (2014). 家族造形法を用いた事例検討会——家族療法家のためのトレーニングとしての有用性—— 心理臨床科学, 4, 53-61.
- 飯干 歩 (2013). メンタライゼーションと愛着, 知能との関わりについて——メンタライゼーション査定面接を用いて—— 臨床心理学研究, 11, 45-61.
- 今里 有紀子 (2021). 養育者の内省機能促進プログラムの開発とその量的検討 応用教育心理学研究, 37 (2), 73-85.
- 石谷 真一 (2019). 子ども対象メンタライゼーションに基づく治療と親子並行面接——親子並行面接をメンタライズする—— 心理相談研究, 20, 3-12.
- 金子 幾之輔 (2008). まばたきチックに対する行動療法的アプローチ 桜花学園大学人文学部研究紀要, 10, 47-58.
- Keaveny, E., Midgley, N., Asen, E., Bevington, D., Fearon, P., Fonagy, P., Jennings-Hobbs, R., & Wood, S. D. (2012). Minding the family mind: The development and initial evaluation of mentalization-based treatment for families. In N. Midgley & I. Vrouva (Eds.), *Minding the child*. Routledge.
- Lawson, D. M. (1988). Using family sculpting and choreography in a student growth group. *Journal of Counseling and Development*, 66, 246-247.
- Lesage-Higgins, S. A. (1999). Family sculpting in premarital counseling. *Family Therapy*, 26 (1), 31-38.
- Lowell, A. F., Peacock-Chambers, E., Zayde, A., DeCoste, C. L., McMahon, T. J., & Suchman, N. E. (2021). Mothering from the Inside Out: Addressing the Intersection of Addiction, Adversity, and Attachment with Evidence-Based Parenting Intervention. *Current Addiction Reports*, 605-615.
- 松葉 百合香・リー スティーブケイ・原口 幸・板野 蛍・岩崎 美奈子・井原 成男・桂川 泰典 (2019). 自己構築におけるナラティブとメンタライジングの関連——研究動向と今後の展望—— 早稲田大学臨床心理学研究, 19 (1), 109-118.
- 松葉 百合香・リー スティーブケイ・原口 幸・岩崎 美奈子・大月 友・桂川 泰典 (2022). 日本語版メンタライゼーション尺度 (The Japanese version of Mentalization Scale : MentS-J) の開発と信頼性, 妥当性の検討. 発達心理学研究, 33 (3), 137-145. <https://doi.org/10.11201/jjdp.33.137>
- McMahon, M. (2014). New trends in theory development in career psychology. In G. Arulmani, A. J. Bakshi, F. T. L. Leong, & A. G. Watts (Eds.), *Handbook of career*

- development: International perspectives* 13-27. Springer Science + Business Media.  
[https://doi.org/10.1007/978-1-4614-9460-7\\_2](https://doi.org/10.1007/978-1-4614-9460-7_2)
- Midgley, N., O' Keeffe, S., French, L., & Kennedy, E. (2017). Psychodynamic psychotherapy for children and adolescents: An updated narrative review of the evidence base. *Journal of Child Psychotherapy*, 43 (3), 307-329.
- 西村 馨 (2022). 第1章 MBT 理論の概観 — いまどきの子どもと親のためのメンタライジング — 西村 馨 (編) 実践子どもと親へのメンタライジング臨床: 取り組みの第一歩 岩崎学術出版社
- 岡藤 円春 (2009). 妊婦の内省機能と情緒応答性の関連: インタビューと日本版 IFEEL Pictures を用いて 日本女子大学大学院人間社会研究科紀要, 15, 171-187.
- 興津 真理子・早樫 一男 (2012). 家族造形法による空間的距離と質問紙による心理的距離との関連について 心理臨床科学 (同志社大学心理臨床センター), 2, 49-56.
- Rossouw, T. (2012). Self-harm in young people. Is MBT the answer? In N. Midgley & I. Vrouva (Eds.), *Minding the child: Mentalization-based interventions with children, young people and their families*, 131-144. Routledge.
- 柴田 康順 (2024). メンタライジングによる抑うつ・不安の低減効果 — アイデンティティを媒介変数としたモデル検討 — パーソナリティ研究, 33 (2), 83-85.
- Slade, A. (2002). Keeping the baby in mind: a critical factor in perinatal mental health. *Zero to Three*, 22, 10-16. (スレイド, A. 狩野 力八郎 (監修) 池田 暁史 (訳) (2011). メンタライゼーション・ハンドブック MBT の基礎と臨床 岩崎学術出版社)
- Slade, A. (2005). Parental reflective functioning: an introduction. *Attachment & Human Development*, 7 (3) : 269-281.  
<https://doi.org/10.1080/14616730500245906>
- Slade, A., Sadler, L. S., & Mayes, L. C. (2005). Minding the baby: Enhancing parental reflective functioning in a nurse mental health home visiting program. In L. J. Berlin, Y. Ziv, L. Amaya-Jackson, & M. T. Greenberg (Eds.), *Enhancing early attachment: Theory, research, intervention, and policy* (152-177). The Guilford Press
- Suchman, N. E., & Bers, S. A. (2015). Mothering from the inside out: A mentalization-based intervention for mothers in substance use treatment. Yale University School of Medicine.
- Suchman, N., DeCoste, C., Castiglioni, N., Legow, N., & Mayes, L. (2008). The Mothers and Toddlers Program: Preliminary findings from an attachment-based parenting intervention for substance-abusing mothers. *Psychoanalytic Psychology*, 25 (3), 499-517.
- Suchman, N. E., DeCoste, C., Castiglioni, N., McMahon, T. J., Rounsaville, B., & Mayes, L. (2010). The Mothers and Toddlers Program, an attachment-based parenting intervention for substance using women: Post-treatment results from a randomized clinical pilot. *Attachment & Human Development*, 12 (5), 483-504.  
<https://doi.org/10.1080/14616734.2010.501983>
- Suchman, N. E., DeCoste, C. L., McMahon, T. J., Dalton, R., Mayes, L. C., & Borelli, J. (2017). Mothering

- From the Inside Out: Results of a second randomized clinical trial testing a mentalization-based intervention for mothers in addiction treatment. *Development and Psychopathology*, 29 (2), 617-636.  
<https://doi.org/10.1017/S0954579417000220>
- Suchman, N. E., Decoste, C., McMahon, T. J., Rounsaville, B., & Mayes, L. (2011). The mothers and toddlers program, an attachment-based parenting intervention for substance-using women: Results at 6-week follow-up in a randomized clinical pilot. *Infant Mental Health Journal*, 32 (4), 427-449.
- 鈴木 浩二・渋沢 田鶴子・櫻井 明・鈴木 和子・光元 和憲・斉藤 重司・中村 はるみ・生島 浩 (1986). 家族療法への招待 (3) 家族療法研究, 3, 67-80.
- 鈴木田 英里・興津 真理子・山根 隆宏 (2020). 家族造形法による親からのサポートの程度の表現と家族理解の変化 神戸大学発達・臨床心理学研究, 19, 1-8.
- 田中 穂乃香・山本 菜々子・桂川 泰典 (2021). 一般他者に対する愛着スタイルとメンタライジング能力の関連 日本教育心理学会第62回総会発表論文集, 389.  
[https://doi.org/10.20587/pamjaep.63.0\\_389](https://doi.org/10.20587/pamjaep.63.0_389)
- 田邊 恭子・米澤 好史 (2009). 母親の子育て観から見た母子の愛着形成と世代間伝達 和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要, 19, 19-28.
- van IJzendoorn, M. H. (1995). Adult attachment representations, parental responsiveness, and infant attachment: A meta-analysis on the predictive validity of the Adult Attachment Interview. *Psychological Bulletin*, 117 (3), 387-403.  
<https://doi.org/10.1037/0033-2909.117.3.387>
- 山口 正寛 (2012). 青年期におけるメンタライゼーションと攻撃性との関連 日本心理学会第76回大会発表論文集  
[https://doi.org/10.4992/pacjpa.76.0\\_1PMC03](https://doi.org/10.4992/pacjpa.76.0_1PMC03)
- 安川 智子・高宮 静男 (2005). 神経性無食欲症の子どもをもつ母親の心理的変化過程 精神科治療学, 20 (8), 827-834.

